

「非常に」についての一考察

陳 連 浚

1. はじめに

日本語の程度副詞について、その中心的な働きは一般に「状態性の意味を持つ語にかかって、その程度を限定する」(注1)とされている。仁田義雄氏はその文法的な働きや共起する述語のタイプから、「程度の副詞」と「量の副詞」に分け、さらにこの「程度の副詞」を「純粹程度の副詞」と「量程度の副詞」とに分けられると述べている(注2)。その中で、いわゆる「純粹程度の副詞」に属するものについて、例えば「非常に、とても、大変(に)、すこぶる、たいそう、はなはだ(しく)、極めて、著しく、極端に、あまり(に)、至って、至極、ごくごく、ごく」などがその代表的なものだと主張している。この「純粹程度の副詞」とされた「非常に」は、次の用例のように主体や対象の数量限定が表されたり、動きの量の限定が行われたりする構文に挿入されると、逸脱性が生じてしまう。

例A ??お酒を非常に飲んだ／??非常に歩いた。

また、次の用例のように否定文脈で使われない(注3)という特性をも持っていると説明している。

例B *非常に暑くない。

仁田義雄氏の指摘によれば、形容詞にかかわっている例が多いこの「非常に」の場合、そのかかわる動詞について、「非常に恵まれた環境」「非常にはつきりしている」「非常にすぐれたコント作家」「非常に効果があり」などのような状態動詞があげられる。それから「非常に高まっており」「非常に減らしている」「非常に抑制された」などのないいわゆる「非限界変化動詞」と、「非常に恐れている」「非常に喜び」「非常に苦しんだ」「非常に望んでいて」「非常に感動した」というようないわゆる「心的活動動詞」と、

「非常に重視している」「非常に努力されて」などのいわゆる「態度の現れに関わる動きを表す動詞」(注4)があると分析している。

鋭い指摘である。しかし、仁田義雄氏のこのような指摘以外、「非常に」に関する研究は、管見の限りちょっと少ないようである。例えば森下(2004)では、「非常に」は聞き手を意識した発話に使われると言って、「対人性」という観点を示していると言っている。また、片山・舛井(2006)では、聞き手に対して、客観的に伝えたいときは、「非常に」が好んで使われるもので、「客観的な改まった文脈でしか使われない」と説明している。会話文か教科書に出ている「非常に」の用例を中心に考察されたものである。

仁田義雄氏の指摘でも動詞にかかわるものについての説明が多かったが、他の品詞とのかかわりについてはほとんど分析されていないのは実状である。このような状況があって、「非常に」について、まだまだ考えられるところが多いと思われるので、本研究は、仁田義雄氏の指摘を踏まえて、新潮文庫の100冊とインターネットで集めた用例を用いて、「非常に」がかかわるもの、また「非常に」が使われる文の特徴を探っていききたい。特に仁田義雄氏が言及しなかった名詞とのかかわりについても、それから否定文脈で使われないということについても、集めた実例を用いて検討していきたい。

新潮文庫の100冊(翻訳の作品を除く)で検索したところ、「非常に」の用例は354例使われていることが分かった。インターネット(<http://languagecraft.jp/kwic/> 2010年12月9日アクセス)で検索したものでは、「23,880件見つかりました」という表示が出ているが、分析の便宜上その先に表示した1000例を対象に分析を行うことにした。

2. 「非常に」の基本的な意味

まず、飛田良文氏と浅田秀子氏が出された『現代副詞用法辞典』(東京堂出版、1994)での「非常に」に関する記述を見てみよう。

- (1) 通常でない状態を表す。(中略)
- (2) (1)から進んだ用法で、程度がはなはだしいことを誇張する様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。(中略) ややかたい文章語で、公式の

発言などに多用される。話者の主観として程度が通常の状態を超えてはなはだしいことを誇張するニュアンスがある。好ましい程度についても好ましくない程度についても用いられる。

また、森田良行氏の『基礎日本語辞典』（角川書店、1997）ではこう説明している。

「ひじょう」も、「ひじょうな暑さ」「ひじょうに暑い」と、程度のはなはだしさを表す。「たいへん」と違って述語「非常だ」の形はなく、また、「に」を落とした「非常」だけでは副詞にはならない。本来「非常の事態」のように、ふだんと違う。“変事”を指す名詞である。（中略）

「非常に」は、「それはひじょうに危険な作業である」「ひじょうに優れた研究として、広く学界でも認められている」のように、文章中で使われる場合には自然であるが、くだけた会話中では落ち着かない場合が出てくる。「ああ、ひじょうに疲れた」などとは言わない。「たいへん」も改まり表現なら「今日は大変疲れましたね」と自然だが、くだけた表現中ではやはり不自然となる。「とても／とっても」「すごく」などが代わって使われる。

「ひじょうに」は文章中、および改まった会話中でも用い、「たいへん」は（中略）逆に「ひじょうに」は事柄の程度を客観的に叙する語なのである。

それから、『広辞苑』第四版（小学館、2001）では、「非常に」のところに次のように書いている。

ひじょうに【非常に】（副詞）はなはだしく。いたく。「一小さい」

以上のように、「非常に」について、主観的か客観的か、学者の判断が対立しているところがあるが、その意味という、「はなはだしく」か「程度がはなはだしいこと」がよく取り上げられるようである。このような記述を大事にして、集めた用例が示した特徴を検討していく。

3. 「非常に」がかかわるもの

「非常に」がかかわるものについて、周知の事実のように、主として形容詞、動詞が取り上げられるが、他の副詞、名詞などのようなものもある。新潮文庫の100冊で検索した用例（354例）から見れば、次のように分けられる。

	用例数	%
形容詞	219	61.9%
動詞	113	31.9%
副詞	16	4.5%
名詞	6	1.7%
合計	354	100%

この集計を見ると、「非常に」と共に使われるのは形容詞、動詞、副詞、名詞の順となっている。この中で6割を超えているので、かなり形容詞というものに集中しているように見える。最も深くかかわっているものと言える。動詞の用例と合わせて全用例の9割を超えている。「非常に」は副詞としての特徴がはっきりと見せている。また、名詞のようなものは6例しか出ていないが、ある傾向性が見れるようである。このような集計結果を踏まえて「非常に」の特徴を検討していくとする。

3.1 形容詞にかかわる用例

前に述べたように「非常に」がかかわるものの中で、最も数多く見られたのは形容詞が使われる用例である。219例出ている。全体の61.9%を占めている。例えば、次のようなものがある。

1. この人は袴をはいて来ているが、私も袴をはかなくちゃいけないのかしら……。二人の仕事はおトクイ様に案内状を出す事と、カンタンな玉づけをならって行く事だった。相棒の彼女は、岐阜の生まれで小学校の教師をしていたとかで、ネーと云う言葉が非常に強い。(林美美子『放浪記』)
2. 時々窓をあけて見る。雪は止んだ。星が出ている。ランプの光で見ると、前の梅の枝に積った雪が非常に美しかった。(志賀直哉『小僧の神様、城の崎にて』)

3. そしてそれは大抵肺病で死んだ人の話なのだった。そしてその話をきいているとそれらの人達の病気にかかって死んで行ったまでの期間は非常に短かった。ある学校の先生の娘は半年ほどの間に死んでしまって今はまたその息子が寝ついてしまっていた。通筋の毛糸雑貨屋の主人はこの間まで店へ据えた毛糸の織機で一日中毛糸を織っていたが、急に死んでしまって、家族が直ぐ店を畳んで国へ帰ってしまったそのあとは直きカフエーになってしまった。(梶井基次郎『檸檬』)
4. 最初の言葉でその人は私の方を振り向きまして。「のっぺらぼー」そんなことを不知不識の間に思っていましたので、それは私にとって非常に怖ろしい瞬間でした。(梶井基次郎『檸檬』)

「強い」「美しい」「短い」「怖ろしい」のような形容詞にかかわる「非常に」の用例である。語尾は「イ」の用例である。このような用例はその特徴として、「非常に」とかかわる形容詞の間にほとんど他の要素が入っていないことが取り上げられるだろう。両者が強くかかわっていることが伺える。しかし、次のような他の要素が間に入っているものもある。

5. 非常に風の強い一夜で、テント全体がその強風に押しつぶされ、ぺしゃんこになり夜露に濡れたテントの天井や壁の部分が寝ているわれわれの顔や体にびたっとくっつくような状況でした。(http://languagecraft.jp/kwic)
6. それから、在宅の部分については、非常に立地条件がよいために業者が非常に多く参入されておりますので、そういった部分については需要に対する供給は100%で、今後5年間いけると考えているところでございます。(http://languagecraft.jp/kwic)
7. プレストン先生がこれまでこのような言語接触状況に関する複数の博士論文を指導した経験を持っているので、ロングにとって非常に学ぶところが多かった。(http://languagecraft.jp/kwic)

このような用例では、「非常に」とそのかかわっている形容詞の間に他の要素が存在している。例えば「風の」「立地条件が」「学ぶところが」はそれである。どちらでも一つの文を構成する要素の一部になるので、関係の

深いものと言える。

また、形容詞にかかわるものの中で、次のような用例もある。

8. 「私もお母さんから云いつかって来たのよ。今日の縫物は肩が凝ったろう、少し休みながら茄子をもいできてくれ、明日麴漬をつけるからって、お母さんがそう云うから、私飛んできました」

民子は非常に嬉しそうに元気一パイで、僕が、

「それでは僕が先にきているのを民さんは知らないで来たの」(伊藤左千夫『野菊の墓』)

9. 親指の中程で疵は少しだが、血が意外に出た。僕は早速紙を裂いて結わえてやる。民子が両手を赤くしているのを見た時非常にかわいそうであった。こんな山の中で休むより、畑へ往ってから休もうというので、今度は民子を先に僕が後になって急ぐ。八時少し過ぎと思う時分に大長柵の畑へ着いた。(伊藤左千夫『野菊の墓』)

「非常に+形容詞+そうだ」の用例である。目で見かけたのをそのまま表現するものである。「非常に」はその通常の状態をかなり超えているニュアンスを示している。

それから、以上のような語尾は「イ」であるものと同じく形容詞とされているものもある。いわゆる「ナ」形容詞が用いられている用例である。このような用例も数多く出ている。

10. 星は首をかしげ、また腹を立てた。あれだけはっきりと帰京の承諾を受け、こっちはその準備をすませてしまった。その出発寸前になって、こんなことを告げられては非常に迷惑だ。親切心から、自分の行動予定表を相手に渡したのが、逆な結果になってしまった。黙って別れていれば、こんな連絡も受けないですんだところだろう。(星新一『人民は弱し官吏は強し』)

11. その頃からぼくは電話が嫌いだったので、この野々宮常務の徹底ぶりには驚いてしまった。もともと野々宮には継続してやる仕事というのはいらないので、一日中会社の机に座っているのは彼にとって非常に暇なことだったのである。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

12. 私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲良く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。然し私の有っている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。(夏目漱石『こころ』)
13. なつかしい唄である。この炭坑街にまたたく間に、このカチュウシャの唄は流行してしまった。ロシヤ女の純情な恋愛はよくわからなかったけれど、それでも、私は映画を見て来ると、非常にロマンチックな少女になってしまったのだ。浮かれ節(浪花節)より他に芝居小屋に連れて行ってもらえなかった私が、たった一人で隠れてカチュウシャの映画を毎日見に行ったものであった。(林芙美子『放浪記』)
14. これに気を良くしたのか、あるいはパチンコに毛の生えた程度のスロットマシンではくだらんと思ったのか、ルーレットをしようと思った。ルーレットというのは非常に単純なゲームだ。大きなテーブルに一から三十六までの数字が並んでいて、客がそのどれかに金を置くのである。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

「迷惑」「暇」「気の毒」「ロマンチック」「単純」のようなものにかかわっている「非常に」の用例である。前述したように、「非常に」とこれらの形容詞の間にほとんど他の要素が入っていないのがその特徴である。両者の関係が強いことが伺える。新潮文庫の100冊の「非常に」の用例の中で形容詞の方が61.9%を占めているということから見れば、無視してはならない特徴と言える。

また、「非常に」とそのかかわっているものの間に他の要素が入っている用例もある。

15. 私は非常に日本語が好きである。(http://languagecraft.jp/kwic)
16. これにつきましては十分にやはり精査する必要があるしまして、事実関係を整理した上で本庁に報告があり、さらに直接日本郵船サイドから聞かないといけませんので、それを十分に確かめて精査をしたということであり、さらに運輸大臣は対策本部長でございますから、そちらにも御報告をし、非常にこれは重大な問題であって、仮に一遍訂正して再度ま

た訂正するとしたら非常に混乱が大きくなってしまふというふうな判断もありまして、さらに精査をさせて、その後官房長官に御報告して公表したということでございました。(http://languagecraft.jp/kwic)

「好き」「重大」にかかわっている「非常に」の用例である。「非常に」とそのかかわっている形容詞の間に他の要素が入っている用例である。「日本語が」「これは」はそれである。「非常に」と合わせて一つの文を構成するものであるので、両者は無関係のものではない。

前に述べたように、以上のような用例は「非常に」の用例全体の61.9%を占めていることから、「非常に」とかかわっているものの中で、形容詞は最も典型的なものになる。

3.2 情態性の動詞にかかわる用例

仁田義雄氏が指摘したように、「非常に」のような「純粹程度の副詞」がかかわる動詞について、いろんな種類のものがある。新潮文庫の100冊の用例とインターネットで検索した用例は数から言えば形容詞に次ぐものであった。合わせて113例使われている。全体の31.9%を占めている。その中で人の情態とかかわりのあるものも多く出ている。目立っているように感じられる。例えば、次のような用例である。

17. 今日もバイト。仕事が忙しく非常に疲れた。帰りに思いきりソナチネをひいて大声で歌をうたって着換え、いつものように歩く。歩道の靴音をきき、車のライトをみながら鼻歌をうたって帰る。どこかでウイスキーをのみたかったが帰りが遅くなるのでやめる。(高野悦子『二十歳の原点』)
18. ところで妙な事はこのお嬢さんがこんな子供の癖に僕と富との関係を知っているような気がしてならなかった事だ。此方の気のせいかと思う事もあったがそうでない場合がよくあった。とにかく僕と富とが会う事は非常に厭がっていた。富は又こんな厭な児だったが、他からは考えられない程に愛しているのだ。(志賀直哉『小僧の神様。城の崎にて』)
19. 「どうしたんだ」

「居ましたよ。虫ですよ。あの尻の光っている奴が、こうやって尻を振っていたんですよ。堪ったもんじゃあない」Kさんは尺取り虫の類を

非常に可恐がった。息を跳反ませている。

それを見に入った。先に立ったSさんが、

「この辺かい？」と後の方に居るKさんを顧みた。(志賀直哉『小僧の神様. 城の崎にて』)

20. 実際富の弱虫には弱った。その上二人のしている事を全然罪悪と思いついでいるには閉口した。僕は二人の関係が只の所謂いたずらな関係ではないのだ、僕が少尉か中尉になれば必ず正式に結婚するのだからと何遍いって聴かしたか知れない。富もそれは非常に喜んでいたが、やはり悪い事をしているという気はどうしても抜けなかった。(志賀直哉『小僧の神様. 城の崎にて』)

21. 「ホラ、君があの蓮華寺へ引越す時、我輩も門前まで行きましたろう——実は、君だからこんなことまでも御話するのだが、あの寺には不義理なことがしてあって、住職は非常に怒っている。我輩が飲む間は、交際わぬという。(略)」(島崎藤村『破戒』)

22. この不愉快な事件を、二階に住んでいた友人であり警察官のジョーに話したことがあった。彼もオニールを非常に嫌悪していたらしかった。私が興奮して、

「今度、奴に出会ったら思い切りぶっとばしてやる」(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

23. 早瀬が死ぬと、とつぜん、人びとは異様に活気づいた。彼等は非常に興奮した。それまで長椅子を遠巻きにしていた彼等は、私を押しつけ、屍体にむらがって彼の名を連呼した。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

24. 安楽常務は阿片および海外貿易の担当であり、非常に気にしていた。星とは反対に神経質なほど心配性であり、今回のごたごたつづきで、顔色もどこかさえなかった。星はそれに気がついて言った。(星新一『人民は弱し官吏は強し』)

以上は「疲れる」「厭がる」「可恐がる」「喜ぶ」「怒る」「嫌悪する」「興奮する」「気にする」のようなものにかかわっている「非常に」の用例である。これらのものは人の情態や情緒と関係のあるものである。特徴的に使われているようである。動詞の中で「非常に」と深くかかわっている一類のものである。仁田義雄氏が指摘した「心的活動動詞」に近いもので、生

理的なもの、心理的なものが入っている。このようなものは、その特徴として、形容詞の用例と同じく、「非常に」とそのかかわっている動詞の間にほとんど他の要素が入っていないということが取り上げられる。形容詞の場合と同じように、ここで「非常に」はその通常の情態をかなり超えているニュアンスを示している。

3.3 状態性の動詞にかかわる用例

人の情態、情緒と関係のあるもの以外、次のように人的か何かの物かの状態性を示すものとかかわっている「非常に」の用例もある。

25. 富裕な百姓でさえ、日本人の上層階級がたべる米を年に二度、口に入れるだけなのです。普通は芋と大根という野菜などが彼等の食物で飲物は水をあたためて飲みます。時には草木の根を掘って食べることもあります。彼等の坐る方法は特別です。我々と非常に違っています。膝を地面や床の上につけ、我々がかがむ時のように足の上に腰をおろすのです。彼らにとってこれは休息となりますが、私やガルベには慣れるまで甚だこの習慣は苦痛でした。(遠藤周作『沈黙』)

26. ナオミは一体、その肌の色が日によって黄色く見えたり白く見えたりするのですが、ぐっすり寝込んでいる時や起きたばかりの時などは、いつも非常に冴えていました。眠っている間に、すっかり体中の脂が脱けてしまうかのように、きれいになりました。(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

27. バスは非常にゆれた。うっかりしていると、天井に頭をぶっつけそうにも思われるくらい、バスは悪路を白いほこりを上げて走っていた。十人ほどの乗客がいたが、ゆれるのがあたり前だという顔で黙っていた。有明の駅を出て、バスはすぐ田圃の中をしばらく走るが、ひといきつく間もなく畑地帯に入り、やがて山地へ向っての勾配を登りだした。(新田次郎『孤高の人』)

28. この事件に対する日本海軍の姿勢には、第三艦隊報道部発表の措辞を見ても、如何にも「まずい事を起してしまった」という狼狽の色が見え、「アメリカと事を構えたくない」という様子が非常にはっきりしていた。(阿川弘之『山本五十六』)

29. この時、アメリカの大統領は、すでにフランクリン・ルーズベルトで、

国務長官はハルである。日本の外務大臣は広田弘毅であった。

米国側は一時非常に硬化し、東京の米国大使館に、「天皇に直接かけあえ」という訓令が来ていたという話もあるが、結局日本の誠意が認められたというかたちで、約二週間後にパネー号事件は解決を見た。(阿川弘之『山本五十六』)

30. 為体の知れない影像是、もしかすると異型の白血球かもしれないが、白血球だとすれば数が非常に多すぎると先生は云った。重松はこんな恐怖感をそそるような医学上の熟語はもう聞きたくなかった。ますます矢須子に対して負目を感じるばかりである。(井伏鱒二『黒い雨』)
31. この試みは、在来の新詩社風の、現実から遊離した象徴的手法の歌から、脱出転換を企てていた当時の彼の歌風に、非常に適合していた。そのような転換がどのようにしてなされて、いわゆる啄木調の歌風を創り出すに至ったか、私は『一握の砂』を中心に一瞥してみようと思う。(石川啄木『一握の砂。悲しき玩具』)

「違っています」「冴えていました」「ゆれた」「はっきりしていた」「硬化し」「多すぎる」「適合していた」のようなもので、人的か何かの物かの状態性を示すものとかかわっている「非常に」の用例である。「非常に」はその通常の状態をかなり超えているニュアンスを示している。情態性の動詞と合わせて113例出ている。形容詞の用例と似ているように、「非常に」とこれらの動詞の間にほとんど他の要素が入っていない。特徴的に使われているようである。

3.4 他の副詞にかかわる用例

形容詞、動詞とかかわっている用例の数ほどではないが、次のように他の副詞にかかわっている「非常に」の用例も16例出ている。全体の4.5%を占めている。

32. 又、第一、当時の歌壇の誰を目標に、この様な新工夫を案じ得たろうか。自ら成った歌が詠み捨てられたまでだ。いかにも独創の姿だが、独創は彼の工夫のうちにあったというより寧ろ彼の孤独が独創的だったと言った方がいい様に思う。自分の不幸を非常によく知っていたこの不幸

な人間には、思いあぐむ種はあり余る程あった筈だ。これが、ある日悶々として波に見入っていた時の彼の心の嵐の形でないならば、ただの洒落に過ぎまい。(小林秀雄『モオツァルト、無常という事』)

33. けれども、はじめは新婚の夫婦のための小ぢんまりとした家のつもりが、いずれはもっと老境に達して病院から移さねばなるまい母の居場所をまず考え、彼自身の料理の趣味から台所を非常にたっぷりととり、それに伴って食堂や居間や自分らの寝室を考慮に入れてゆくと、相当に大がかりな建築になるのを防ぐわけにいかなかった。(北杜夫『楡家の人びと』)
34. 海軍大臣の米内光政は、平素あまりに無口すぎて、一部から頼りなく思われていた。総理は陸軍大臣とは始終食事を共にして話し合っているが、海軍大臣はその席に加わらない。或は加えてもらえない。そのため陸軍では課長クラスの者まで知っているようなことを、海軍では高松宮ですら御承知でない場合がある。これは大臣が無能なため海軍が陸軍に馬鹿にされているのだという不満が、海軍部内にかなり強かった。金魚大臣などという蔭口の行われた所以である。金魚大臣の米内はしかし、この時語尾を濁さず、ためらうことなく、非常にはっきりと答えた。(阿川弘之『山本五十六』)
35. 自宅に於ても、徹吉の性癖には少しづつあまり芳しからぬ変化が見られた。なによりも、まだ毫碌する歳でもないのに、非常に屢々度忘れをした。病院の用事までを度忘れした。眼鏡を置き忘れ、その置いた場所が思いだせなかった。(北杜夫『楡家の人びと』)

「よく」「たっぷりと」「はっきりと」「屢々」のような他の副詞にかかわっている「非常に」の用例である。その共通しているところと言えば、ある状態を表すことであろう。その中で数多く出ているのは「よく」というものであった。副詞の中で「非常に」とかわりの深い一類のものであると言える。後に出てくる動詞より、これらの副詞が「非常に」ともっと深くかかわっているようである。

3.5 名詞にかかわる用例

「非常に」について、これまでの研究からあまり取り上げられなかったのは名詞にかかわる用例である。新潮文庫の100冊の用例とインターネットで

検索した用例から、次のようなものが使われている。

36. 私は非常にうそつきである。言葉を放った瞬間に、うそだなあと感じ、あるいはしばらく経ったあと、あれはうそだったと思ったり。

沈黙は金。(高野悦子『二十歳の原点』)

37. 我々は夜に入って家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠っていました。月曜になって、学校へ出ると、私は朝っぱらそうそう級友の一人から調戯われました。何時妻を迎えたのかと云ってわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だといって賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男に何処かで見られたものと見えます。(夏目漱石『こころ』)

38. 「やれそうもないと思ったけれど、やって見ると愉快的なもんだね。それにドクトルの云い草じゃないが、非常に体の運動になる」

「それ御覧なさいな、だから何でも考えていないで、やって見るもんだわ」(谷崎潤一郎『痴人の愛』)

39. 山本の妻の礼子については、開戦後の事だが、堀悌吉が、

「山本の細君は日本一だよ。山本が日本一なのに、それより強いんだからあれはほんとの日本一だよ」

と言った事があった。山本の戦死後は、礼子に「女元帥」という綽名がついた。子供に甘く心のやさしい人であったが、一方字などはこれまた極めて達筆の男まさりで、非常に太っ腹のところがあったらしい。

山下源太郎大将は礼子の母親と従兄妹で、したがって山本の家と山下大将の家とは、親戚づき合いである。(阿川弘之『山本五十六』)

40. 長野政雄氏は実に質素な人であった。

「庶務主任と言え、相当の地位であったが、いつもみすぼらしい風態をしておられた」

と、同じ下宿だったある信者が述懐しているとおり、洋服などもほとんど新調しなかったらしい。また非常に粗食で、弁当のお菜なども、大豆の煮たものを壺の中に入れておき、一週間でも十日でもその大豆ばかり食べていたという。という、甚だ吝嗇に思われるかも知れないが、決してそうではなかった。(三浦綾子『塩狩峠』)

41. いきなりで失礼ですが、非常に疑問です。(http://languagecraft.jp/

kwic)

42. 庵主は、その時女性に背を向けて仕事をしていたのだが、はっと振り返ると非常にベッピンさんの女性がいるではないか! (<http://languagecraft.jp/kwic>)
43. 2万円の価格差以上の違いはあるのである意味で非常にお買い得の車種。(<http://languagecraft.jp/kwic>)
44. これは非常に福音ですが、人の遺伝子を調べることはプライバシーの問題になりますので注意が必要です。(<http://languagecraft.jp/kwic>)

「うそつき」「美人」「体の運動」「太っ腹」「粗食」「疑問」「ベッピンさん」「お買い得」「福音」のような名詞にかかわっている「非常に」の用例である。ある状態性か情態性を有しているから、「非常に」とともに使われることが可能になるようである。形容詞、動詞にかかわる用例と同じように、ここで「非常に」はその通常の状態、情態をかなり超えているニュアンスを示している。「非常に」の用例の中で極少数であるが、特徴的に使われている。

3.6 否定表現と共起するもの

仁田義雄氏が指摘したように、「非常に」はふつう否定文脈と共起しない。しかし、新潮文庫の100冊とインターネットで集めた用例の中で、次のような用例も出ている。

45. 黙って耐えていることはいけないと僕は思うんです、と教員がうなだれたままの僕らに苛立っていた。僕らが黙って見ていたことも非常にいけなかった。無気力にうけいれてしまう態度は棄てるべきです。(大江健三郎『死者の奢り、飼育』)
46. プロフィール尾崎健太1969年7月5日生創業55年を迎える我が社は、職人の腕と頑固さは一癖も二癖もあり、蒟蒻作りへの探究心と思入れの深さは非常に甘えを許さないものを持っております。(<http://languagecraft.jp/kwic>)
47. 3人に非常に申し訳なく思う。(<http://languagecraft.jp/kwic>)
48. まず、大教前駅からキャンパスまでの道のりが長く険しいため、毎日死

に物狂いで登校しなければならないことが非常に納得いかない。(http://
languagecraft.jp/kwic)

49. 第5は、妻が兄を非常に尊敬していなかったなら、妻に対して心を惹かれることはなかったかもしれないということ。(http://languagecraft.jp/kwic)

50. そのときは非常に教科書もないし何もないしね、非常に教師としても非常に悩んだ、どういうことをやっていったらいいかということですね、非常に困った。(http://languagecraft.jp/kwic)

「いけなかった」「甘えを許さない」「申し訳なく」「納得いかない」「尊敬してなかった」「ない」のような否定表現にかかわっている「非常に」の用例である。場合によっては「とても」「すごく」に近いものであろうと解釈してもいいと思われる。それから用例が数多く出ているという事実から見ると、ある程度否定文脈でも使うことが可能であることを意味している。仁田義雄氏が指摘している「*非常に暑くない」というような「形容詞＋ない」のようなものは見つからないが、以上の用例のように、「動詞＋ない」と「ない」だけにかかわっているものである。形容詞のような特性を有しているから、使用が可能になると言えるであろう。このような用例と似ているように、次のように「不－」「非－」のような表現にかかわっている「非常に」の用例もある。

51. この点で新学習指導要領は非常に不十分であることは各方面から指摘されています。(http://languagecraft.jp/kwic)

52. インスピロンの加湿は、挿管下でTチューブを用いるときは別として、マスクでは暑くてべちゃべちゃになり、ただでさえ苦しい患者にとって非常に不快です。(http://languagecraft.jp/kwic)

53. 総合的に判断して非常に不満や不満普通満足非常に満足この病院に、利用者に対する「優しさ」を感じるでしょうか。(http://languagecraft.jp/kwic)

54. 何と原始的な方法だろうと思いつつも妙に納得、でも一方で非常に不安になってしまいました。(http://languagecraft.jp/kwic)

55. 市町村によって大きなバラツキがあり、現時点を基準にすると草津市

など遅れた地域に住んでいる会員さんは、非常に不利な状況におかれることとなります。(http://languagecraft.jp/kwic)

56. 思春期外来思春期は、身体も心も非常に不安定な時期です。(http://languagecraft.jp/kwic)
57. この過程で、一旦濾過された原尿の九九%が尿細管で再吸収を受けて体内へ戻るというエネルギー効率からは非常に不経済な仕事をしているのが不思議です。(http://languagecraft.jp/kwic)
58. (一体どんぐらいなのか定かではないところが非常に不親切なレシピです、というより、とてもレシピとは呼べません、ごめんなさいごめんなさい) (http://languagecraft.jp/kwic)
59. こんな波形のことをリップルといいます。その表面波形をリップルマークといいます。この場合、非常に非対称な形をしており、一方向の流れ(この場合右から左の流れ)でできたことがわかります。(http://languagecraft.jp/kwic)

「不十分」「不快」「不満」「不安」「不利」「不安定」「不経済」「不親切」「非対称」のようなものにかかわっている「非常に」の用例である。「不」か「非」が存在している。ある状態か情態を示していることはその共通しているところと言えるであろう。これらのものは形容詞としての属性を有し、形容詞の一類だから使用されることが可能になると言える。

4. 「非常に」が使われる文の特徴

「非常に」とそのかかわるものについて、その用例を見て検討してきた。ここで「非常に」が使われる文の特徴を見てみたい。例えば、前に取り上げた例2と例4をもう一度見よう。

2. 時々窓をあけて見る。雪は止んだ。星が出ている。ランプの光で見ると、前の梅の枝に積った雪が非常に美しかった。(志賀直哉『小僧の神様。城の崎にて』)
4. 最初の言葉でその人は私の方を振り向きました。「のっぺらぼー」そんなことを不知不識の間に思っていましたので、それは私にとって非常に怖ろしい瞬間でした。(梶井基次郎『檸檬』)

まず、この二つの用例から見れた共通しているところと言えば、「非常に」が文末に使われるということが取り上げられるだろう。このような用例は数多く出ている。見逃してはならないことである。

10. 星は首をかしげ、また腹を立てた。あれだけはっきりと帰京の承諾を受け、こっちはその準備をすませてしまった。その出発寸前になって、こんなことを告げられては非常に迷惑だ。親切心から、自分の行動予定表を相手に渡したのが、逆な結果になってしまった。黙って別れていれば、こんな連絡も受けないですんだところだろう。(星新一『人民は弱し官吏は強し』)
11. その頃からぼくは電話が嫌いだったので、この野々宮常務の徹底ぶりには驚いてしまった。もともと野々宮には継続してやる仕事というのはいたいしなかったもので、一日中会社の机に座っているのは彼にとって非常に暇なことだったのである。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

例2、例4と同じで、「非常に」が文末に使われていることは以上の用例の共通しているところである。また、「雪が非常に美しかった」「こんなことを告げられては非常に迷惑だ」「それは私にとって非常に怖ろしい瞬間でした」「一日中会社の机に座っているのは彼にとって非常に暇なことだった」が示しているように、ある判断か評価を表現しているところに、「非常に」が用いられている。つまり、「雪」と「出発寸前になって、こんなことを告げられる」に対して、それぞれ「非常に美しい」と「非常に迷惑だ」という判断か評価を下したわけである。それから「私にとって非常に怖ろしい瞬間でした」「彼にとって非常に暇なことだった」ならもっとはっきりとこの特徴を見せてくれているのである。このようなことは動詞にかかわる用例からも見られる。

28. この事件に対する日本海軍の姿勢には、第三艦隊報道部発表の措辞を見ても、如何にも「まずい事を起してしまった」という狼狽の色が見え、「アメリカと事を構えたくない」という様子が非常にはっきりしていた。(阿川弘之『山本五十六』)
31. この試みは、在来の新詩社風の、現実から遊離した象徴的手法の歌か

ら、脱出転換を企てていた当時の彼の歌風に、非常に適合していた。そのような転換がどのようにしてなされて、いわゆる啄木調の歌風を創り出すに至ったか、私は『一握の砂』を中心に一瞥してみようと思う。(石川啄木『一握の砂、悲しき玩具』)

つまり「日本海軍の姿勢には」こう「という様子が非常にはっきりしていた」と「この試みは」「当時の彼の歌風に、非常に適合していた」が示しているように、「非常に」は共通して文末に使われているし、「はっきりしていた」「適合していた」というある判断か評価を表現している。「非常に」の無視してはならない特徴である。

5. おわりに

「非常に」がかかわるものと、「非常に」が使われる文の特徴を中心に検討してきた。一部の名詞にかかわって使われること、一部の否定文脈での使用が可能であること、よく文末に使われてそのかかわるものと一緒である判断か評価を表現していることなど、新潮文庫の100冊とインターネットで集めた用例から伺えたことである。このような特徴を大事にして、同種類のもの、例えば「とても」「たいへん」などのようなものとの比較対照は今度の課題とする。

注

- 1 『国語学大辞典』(1980 国語学会編)
- 2 『副詞的表現の諸相』164p (仁田義雄 2002年)
- 3 『副詞的表現の諸相』166p (仁田義雄 2002年)
- 4 『副詞的表現の諸相』166p-179p (仁田義雄 2002年)

主な参考文献

1. 片山きよみ・舛井雅子 (2006) 「初・中級レベルの日本語教育で教える程度副詞：とても・大変・非常に・すごく・ひどく・本当に」『熊本大学留学生センター紀要』9
2. 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』
3. 新村出 (2001) 『広辞苑』小学館
4. 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版

5. 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
6. 森下訓子（2004）「程度副詞「とても」の肯定用法―「表出」について」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』4
7. 森田良行（1997）『基礎日本語辞典』角川書店